大野城市歴史資料展示室　解説シート　民俗No.20

民具５（夏の民具―虫よけの道具―）

大野城市教育委員会

虫をよける民具

蚊帳　寝ている間に蚊にさされないように、寝室に吊るす網です。室内で過ごすときも、蚊などの害虫が入って大変だったので、非常に便利な道具でした。四つの隅につく吊り手を、部屋の長押(壁の上部にある板。かぎなどが引っかかるようにへこみがある)から吊り下げます。この中で寝れば蚊が入ってきませんが、中に入るときは周囲の蚊をうちわなどで追い払いながら、裾をあまり大きくめくらずにかがんで入るのがコツでした。昔の子どもたちは何度も入り方を教えられ、大きくめくったりすると「蚊が入る」と叱られていたそうです。６畳間に吊るすサイズの蚊帳がほとんどですが、もっと広い部屋用や、折り畳み式の「母衣蚊帳」、小さい「枕蚊帳」、傘状の「赤ちゃん用蚊帳」などがあります。

（上）蚊帳　（下）蚊帳を吊る様子

蚊やり　蚊を追い払う道具です。この中に杉・松のおがくずやヨモギなどの草を朝から取って干したものを入れ、いぶした煙を出していました。夕暮れ時に一番効果があったそうです。草を燃やした煙で蚊やブヨを追い払うのは良い虫よけ方法の一つで、もっと大掛かりな場合は庭でヨモギなどをたくさん燃やし、煙を家の中に入れて虫を追い払ったりもしました。明治18年～19年にドイツやアメリカから除虫菊がもたらされ、それで作られた蚊取り線香が売られると、以前より楽に蚊よけができるのでたちまち日本中に普及しました。

噴霧器　家の中の害虫・蚊やゴキブリを追い払うために殺虫剤を使いましたが、今のようなスプレーができる前は、こうした噴霧器を

使い、水鉄砲の要領で害虫に吹きつけていました。薬品は別に瓶入りで売られており、噴霧器の入れ物部分に薬品を継ぎ足すようになっていました。

蠅取り器　家の害虫・蠅を器におびき寄せ捕らえる道具です。蠅は、食べ物などに寄ってくるので蚊とともに嫌われました。このほかにも、蠅たたき（昔はシュロの葉を編んで作った、蠅を叩いて殺す道具）・蠅とり紙（蠅とりリボンとも言う。明治時代にアメリカやドイツから輸入された吊り下げ式の強力な粘着テープで、飛んで来た蠅を捕まえる）・蠅取り瓶（内側に米のとぎ汁や水をため、容器の下にご飯粒や砂糖を置き、蠅をおびきよせ水に落す特別なガラス容器）がありました。また、食べ物や料理に蠅が寄りつかないようにする道具としては、蠅帳（扉に網がついた食器入れや飲物入れ）・蠅いらず（テーブルの上に傘のように広げる木綿やナイロン製の蠅よけ道具）などもありました。

現在は下水道が整備され、田んぼや川が住宅地の周辺から激減し、殺虫剤や虫除けが効果の高いものになったことで昔のように直接虫の害に悩まされることは少なくなりました。これらの道具から、人々が昔の夏の時期にどんな暮らしの知恵を働かせていたか、理解してもらえれば幸いです。

(2004.3.31)

噴霧器を使う様子

（上）蠅取り器　（下）蠅を取る仕組み